

2020年5月31日（日）「困難の中で語る力を与える聖霊」

使徒 4:23-31 《聖書協会共同訳》

23 さて二人は、釈放されると仲間のところへ行き、祭司長たちや長老たちの言ったことを残らず報告した。24 これを聞いた人たちは心を一つにし、神に向かって声を上げて言った。「主よ、あなたは天と地と海と、そこにあるすべてのものを造られた方です。25 あなたの僕であり、私たちの父であるダビデの口を通し、あなたは聖霊によってこうお告げになりました。『なぜ、諸民族は騒ぎ立ち、諸国の民は空しいことを企てたのか。26 なぜ、地上の王たちは立ち上がり、君主たちは集まって、主とそのメシアに逆らったのか。』27 事実、この都でヘロデとポンティオ・ピラトは、諸民族やイスラエルの民と共に集まって、あなたが油を注がれた聖なる僕イエスに逆らい、28 御手と御心があらかじめそうなるようにと定めていたことを、すべて行ったのです。29 主よ、今こそ彼らの脅しに目を留め、あなたの僕たちが、堂々と御言葉を語れるようにしてください。30 どうか、御手を伸ばし、聖なる僕イエスの名によって、病気が癒やされ、しるしと不思議な業が行われるようにしてください。」31 祈りが終わると、一同の集まっていた場所が揺れ動き、皆、聖霊に満たされて、堂々と神の言葉を語りだした。

【序論】

教会暦では、今日は「ペンテコステ」と呼ばれる主日礼拝となります。この礼拝動画をご覧ください。皆様の中には、もしかしたら初めてその名称をお聞きになる方もいらっしゃるかもしれませんが、初めに少し説明させていただきます。

イエス・キリストは十字架で死んで後、三日目に甦り、多くの弟子たちの前に現れ、40日に亘ってご自身の復活を証しました(1:3)。そして、弟子たちに一つの約束を残して、父なる神様の許へ昇って行かれました(1:9)。その約束とは、昇天後やがてご自身の御霊である聖霊が弟子たちの上に降るであろうというものです(1:5)。それから、一同が一つ所に集まっていたとき、激しい風のような音とともに約束の聖霊が降り、炎のような舌が彼らの上に留まり、各々外国語でキリストの復活を宣べ伝え始めたというのです(2:1-4)。このことが起きた日がユダヤ教の「五旬節」という日(過越の祭から数えて50日目。「収穫祭」とも言う)に当たりましたから、そのギリシャ語読みである「ペンテコステ」と呼ぶようになりました(主イエスの十字架の死は五旬節の49日前＝過越の祭の翌日)。

この「聖霊の満たし」という出来事は、この時限りで終わってしまったものではなく、その後の教会史の中で繰り返し起きていることでありますから、私たちにも同様の神の御業が起きることを願って、毎年「ペンテコステ礼拝」を守っているのです。使徒言行録(使徒の働き)という書は、実質的には「聖霊行伝」と呼ばれるべきであり、教会を通して力強く働いた聖霊の御業を証しする書です。私は毎年のペンテコステ礼拝において、本書全体から語っていかうと考え、2012年から講解を始めました。年に1回というゆっくりペースではありますが、一生かけて完結できればよいと思っております。

【本論】

本論 1. 議会の脅しを仲間たちに報告する

さて、今日は 4:23-31 を見てまいりますが、この箇所がどういう文脈上にあるかをまず知る必要があるでしょう。4章の冒頭は、十二弟子の筆頭であるペテロとヨハネが捕えられ、留置され、裁判にかけられるという場面でした。どうして彼らがそのような目に遭ったかという、事の発端は3章で生まれつき足の不自由な男性を癒したこと、それもイエスの御名によって癒したことによります。この出来事を見た多くの人がイエスをキリストと認めました。神殿でのペテロの説教を聞いて、数多くのユダヤ人が罪を悔い改めたのです。ところが、それに苛立った「**神殿の主管、サドカイ派の人々**」(4:1)が二人を捕え、翌日ユダヤ教最高議会が開かれました。二人はそこに集まった人々にも堂々と復活の主を証ししました。議会は二人に罪を認めることができず、反論もできなくなり、ついには強硬手段に訴え、「**イエスの名によって一切話したり、教えたりしないようにと命じた**」(4:18)というのです。それに対して二人は「**神に聞き従うより、あなたがたに聞き従うほうが、神の前に正しいかどうか、ご判断ください。私たちは、見たことや聞いたことを話さないではいられないのです**」(4:19-20)と立派に答え、更に脅されながら議会后にしました。

さて、ここには本質的にどのような問題があるのでしょうか。それは、言論の自由、信教の自由が制限されたということです。あるいは、キリスト教が禁教に指定されたと言っても過言ではありません。古代ギリシャの政治家であり弁論家であったデモステネス（前384年頃～前322年）は、「自由な市民にとって、自由なことばの権利を奪われるより大きい不幸はない」という言葉を残したそうですが、人間が言葉において萎縮する状況（真実を語れない状況）というのは、偏った思想、歪んだ社会を形成することになるでしょう。

さて二人は、釈放されると仲間のところへ行き、祭司長たちや長老たちの言ったことを残らず報告した。(4:23)

「祭司長たちや長老たちの言ったこと」というのは、「『あの者たちをどうしたらよいだらう。彼らが行った目覚ましいしるしは、エルサレムの住民全体に知れ渡っているので、否定しようもない。しかし、このことがこれ以上民衆の間に広まらないように、今後あの名によって誰にも話すなと脅しておこう。』そして、二人を呼んで、**イエスの名によって一切話したり、教えたりしないようにと命じた**」(4:16-18)に凝縮されている内容を指すでしょう。本書は「クリスチャンの視点」で書かれているため、むしろ二人が優位に立っているようにも見えますが、権力に脅されるという事態を軽く見ることはできません。ペテロとヨハネは要注意人物として監視の対象になったのです。ユダヤの会堂からは追放されたようなもので、それはユダヤ社会から除外されるほど危険な状況でした。村八分にされ、明日食べるものも買えなくなるかもしれない。現代で言えば、携帯電話の契約もできなくなるような状況ではないか。つまり、社会的に不利な立場に立たされたということです。二人は釈放後、仲間たちの所へ戻り、自分たちの身に起きたことを報告しました。

本論 2. 祈りの内容① ～詩篇 2 篇の成就～

これを聞いた人たちは心を一つにし、神に向かって声を上げて言った。「主よ、あなたは天と地と海と、そこにあるすべてのものを造られた方です。あなたの僕であり、私たちの父であるダビデの口を通し、あなたは聖霊によってこうお告げになりました。『なぜ、諸民族は騒ぎ立ち、諸国の民は空しいことを企てたのか。なぜ、地上の王たちは立ち上がり、君主たちは集まって、主とそのメシアに逆らったのか。』事実、この都でヘロデとポンティオ・ピラトは、諸民族やイスラエルの民と共に集まって、あなたが油を注がれた聖なる僕イエスに逆らい、御手と御心があらかじめそうなるようにと定めていたことを、すべて行ったのです。(4:24-28)

ここに記録されているのは、新約聖書中最も長いと言われる祈りです。まず、神に対する丁寧な呼びかけがあります。「主よ」(Δέσποτα)という言葉は「主権者」を意味し、通常使われる「キュリエ」とは異なります。「支配者である神」が強調されている。「天と地と海と、そこにあるすべてのものを造られた方」と続くように、万物が神の支配と摂理の下にあり、世の権力者もそこに含まれていると言われているのでしょう。25-26 節で引用されているのは詩編 2:1-2 の聖句ですが、元々この詩編は王の戴冠式または王国の危機にあつて戴冠式を思い起こすために書かれたと言われています。イスラエルの王に対して周辺諸国が手を組んで反逆するという状況が想定されている。実際の文章と比較してみましょう。

なぜ、国々は騒ぎ立ち、諸国の民は空しいことをつづやくのか。なぜ、地上の王たちは立ち上がり、君主らは共に謀って、主と、主が油を注がれた方に逆らうのか。(詩編 2:1-2)

主イエスの弟子たちは、自分たちが置かれている状況と、この詩編の背景とが見事に一致するのを見たのです。主イエスはまさしく「イスラエルの王」であり、それどころか「世界の王」として来られたというのに、この世は彼を認めず反逆を企てたのだと。ここでは具体的に誰が誰を指しているのかまで暗示／明示されています。

諸民族・諸国の民……………主イエスを集団リンチしたローマの兵卒
 地上の王たち……………ヘロデ・アンティパス
 君主たち……………ポンティオ・ピラト
 主とそのメシア……………神と主イエス

第 1 世紀のキリスト教会はまだ社会的にも力が弱く、少人数で、国家からも新興宗教として目をつけられるような立場にありました。それにも拘らず、自分たちが信じているイエスを「世界の王」とし、彼を殺した人々を「反逆者」と見る視点を持つのはすごい。現実には起きている苦難を聖書的に解釈する目が養われていたのです。しかも、「反逆者」はイエスを処刑したことで勝利を得たかのように見えるが、実はその悪しき企みさえも神の大きなご計画の下にあったと説明する。つまり、神がひとり子を世に遣わし、多くの人の罪を担って死ななければ、この世が罪から贖われる道は開かれなかった。イエスを処刑した人々の行為は弁解の余地なき「悪」であったにも拘らず、知らずして神の御旨に沿って行動していたということが言われているのです。主の弟子たちは、このような高い視点に立った上で、祈りを続けます。

本論 3. 祈りの内容② ～状況が変わることではなく、彼ら自身が強められるように～

主よ、今こそ彼らの脅しに目を留め、あなたの僕たちが、堂々と御言葉を語れるようにしてください。どうか、御手を伸ばし、聖なる僕イエスの名によって、病気が癒やされ、しるしと不思議な業が行われるようにしてください。(4:29-30)

ここで注目すべきことは、彼らが敵対者の企てを挫いてくださいとか、困難な状況が改善されるようにとか、そういう祈りをささげているのではないということです。むしろ、ここで祈られていることは、状況は何も変わらなかったとしても、自分たちが強められて、大胆に語るができるようにという願いなのです。彼らは元より「迫害は起きるもの」という前提に立ってこの状況に立ち向かおうとしている。詩編 2 編が引用されたところには、既に、イエスへの冒瀆も起こるべくして起きたことであり、彼の弟子たちもまた同様に迫害を受けるということが想定されています。なぜか。それは、キリストが光だからです。世を照らすまことの光であるからこそ闇に憎まれたのです。[※引用：新改訳 2017]

- ・ すべての人を照らすそのまことの光が、世に来ようとしていた。(ヨハネ 1:9)
- ・ 世があなたがたを憎むなら、あなたがたよりも先にわたしを憎んだことを覚えておきなさい。もしあなたがたがこの世のものであったら、世は自分のものを愛したでしょう。しかし、あなたがたは世のものではありません。わたしが世からあなたがたを選び出したのです。そのため、世はあなたがたを憎むのです。(ヨハネ 15:18-19)
- ・ わたしのために人々があなたがたをののしり、迫害し、ありもしないことで悪口を浴びせるとき、あなたがたは幸いです。(マタイ 5:11)

私たちは、信仰生活の中で苦しいことに直面すると、このように祈りやすいのではないのでしょうか。「どうしてこんな目に遭わなくてはならないのですか」「迫害者を打ちのめしてください」「困難な状況を回避させてください」と。しかし、聖書をトータルで見たとき、信仰者たちは常に苦しみを通っていることが分かります。そして、その苦しみの中にあっても神が共におられ、それを乗り越える力を与えておられるのを見るのです。

最近ディボーションで読んでいた箇所が創世記 39 章のヨセフの苦しみの場面だったのですが、彼は兄弟たちに売り飛ばされ、エジプトで奴隷となり、その中で誠実に生きた結果主人に見初められ、しかし主人の妻の誘惑を払いのけたがゆえに憎まれ、彼女の偽りの証言によって主人の怒りを買って、牢に入れられたというストーリーです。その後、彼はエジプト王の夢を解き明かしたことにより、ついにはエジプトの宰相となっていきます。すべて、苦しみの中にあっても神が共におられた結果でした。創世記 39:21 の聖書協会共同訳の注釈に、このようなことが書かれていました。「神は、人間を困難な状況に陥ることから回避させることはしない。しかし神の恵みと祝福は困難な状況の中でさえも変わることがない」。私たちの祈りの質もまた変えられていく必要があるかもしれません。今苦しみの中にある方々もきっといらっしゃることでしょう。しかし、信仰を捨てることなく、神が共におられ、この状況を通してさえも最善の御心を実現してくださると信じ耐え忍んでいきたいのです。

弟子たちの祈りには、もう一つの要素があります。「どうか、御手を伸ばし、聖なる僕イエスの名によって、病気が癒やされ、しるしと不思議な業が行われるようにしてください」という内容です。それは、現実苦しんでいる人々に何としても助けの手を差し伸べたいという熱意であり、彼らが真に愛に基づいて福音宣教をしていることがそれによって裏付けられるということです。言葉が空回りすることなく、神の御業がなされるのをこの目で見せてくださいと、私たちが祈ることができます。

祈りが終わると、一同の集まっていた場所が揺れ動き、皆、聖霊に満たされて、堂々と神の言葉を語りだした。(4:31)

神は祈りに応え、弟子たちに語る力をお与えになりました。また、言葉だけではなく、その後不思議な御業が弟子たちを通して行なわれていったことも 5:12 以下に記されています。

【結論】

私たちが聖霊の満たしを求めるところには、困難な状況下にあっても福音を述べ伝える力が与えられるようにという積極的な祈りが伴います。キリストの弟子である以上、何の苦勞もせずに生きていくことはできません。なぜなら、主ご自身が苦しみを通して多くの人に慰めをお与えになったからです。私たちが、想像もできないようなことが起きてくる世の中に生きていますが、驚き怪しむことなく、それらに対処していく力が与えられるように、その中であつてもどのように福音を宣べ伝えていけばよいかを、主に問いたいと思うのです。そして、恐れや羞恥心が取り去られ、「大胆に」(原文では「あらゆる大胆さをもって」)生き、御言葉を語るができるよう、聖霊の助けを求めていきたいと思えます。

【祈り】

力ある神よ。主イエスが約束されたように、弟子たちは確かに聖霊の満たしを受け、困難な状況下にあつても大胆に福音を宣べ伝えました。もはや不可能と思われる中であつて、神の霊はそれを突き抜けるパワーを人に与えます。時代は違いますが、私たちにも同じ御業をなしてください。与えられたたった一回の人生を無駄にすることなく、主イエスの救いを時を逸することなく宣べ伝えることができますように。福音のためなら何でもやろうという熱意を与えてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
聖なるご計画の下、悪しき者の企みをも用いて、贖いの御業を成し遂げ給うた、父なる神の愛、
ご自身の復活を宣べ伝えさせるため、使徒たちに約束の御霊を降し給うた、主イエス・キリストの恵み、
如何なる困難な状況下にあっても、大胆に福音を語らせ給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。